中国経済成長の動学非効率性について

―その原因を探って―

January, 2011

一橋大学大学院　顧濤

要旨

本稿は 1978 年の改革開放政策を実施して以来、高い経済成長を実現してきた中国経済運営の効率性について議論する。中国のマクロ経済データを用いた分析を通して、中国の GDP 成長は資本投資を牽引役とした外延的な経済成長の可能性があり、90 年代後半には TFP 成長率が低下傾向にあることがわかった。また、Abel et al. （1989）が提示した指標を中国経済へ応用したところ、中国経済が 90 年代以降に動学非効率的な成長経路に陥っていることを示唆する結果が得られた。

Hayashi（2006）は資本所得が過少に支給される場合、修正黄金律を上回る過剰資本蓄積の経路をシンプルな成長モデルで示している。本稿では、中国のマクロ経済データを用いて、中国において資本所得と労働賃金の両方がともに過少に支給されている可能性を間接的に明らかにした。労働賃金の過少支給を新たに考慮し、黄金律を上回る水準の過剰資本蓄積の経路を、Hayashi（2006）を拡張したモデルで示せた。生産要素に対する過少支給の結果、企業部門に大量な内部留保を生み出し、社会全体の過剰資本蓄積につながったと考えられる。

最後に、齊藤（2008）の手法に倣い、90 年代以降に黄金律を超えていたと考えられる資本蓄積過程を伴った中国経済において、家計は年率およそ 3%－10%で、極めて大きな同値消費の劣化に相当する厚生費用を負担してきた結果が得られた。

Keywords: 中国、改革開放政策、成長会計、TFP、過小支給、動学非効率性、経済厚生
JEL classification: O10; O15; O40; O53